

子育てに奮闘する親御さん達へ（中）

まず大人が活き活きと人生を楽しみましょう

様々な理由で学校に行けず、居場所がなく困っている子どもや親と向き合い、彼らが安心して居られる場所をつくることに、約40年に亘って尽力されてきた西野博之氏に、これまでの体験と、現在、子育てに奮闘している親御さん達に向けた応援メッセージをお伝えします。

——子どもがどんどん生きづらくなっているのはなぜでしょうか？

西野 結局、親が追いつめられるているからです。親に余裕がなく、親が生き活きとしていない。「生きるって楽しいな。お父さん、今これにハマってるんだよ」とか、「お母さんはこれが生きがいよ。あなたも早く大人になつたらしいわね。大人になつた

ら楽しいことがいっぱいあるわよ」という大人が増えてくれれば、子どもは自殺もしないし、不登校にもなりにくい。ただ、残念ながら、人生を楽しんでいる大人が見えにくく社会になっています。

2000年12月に、川崎市子ども権利条例というものを作りました。私はこの権利条例の策定に、調査研究委員会の世話人として関わりまし

た。条例ができるまで、2年間で約200回の会議と集会を開きました。その条例は、川崎市議会で満場一致で採択され、2001年4月に施行されました。その直前に市民報告集会を開催し、私がマイクを握って、「市民の皆さん、こんなに良い条例ができたのでよく知っていて下さいね！」と、ドヤ顔で話していました。その時、その報告集会の場に、策定



認定NPO法人
フリースペースたまりば
理事長 西野博之

川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん他、各事業組合アドバイザー。1986年より、不登校児童・生徒などの若者の居場所づくりに関わる。

子育て

に関わってくれていた子ども達がドドードーと入って来てしまったのです。

「え？ 今日は君達の出番はないけれど、どうしたの？」 と言うと、「分かってるよ。だけどね、私達も今、最

後の会議をやって、どうしても一言言いたいことができちゃったの。だから、そのマイク貸して！」と言つて、私のマイクを取つて、高校生の女の子が次のように切り出しました。

「まず大人が幸せでいてください。大人が幸せじゃないのに、子どもだけ幸せにはなれません。大人が幸せしていく中で、子どもは安心して生きることができます」

これは、大人達への痛烈なカウント一パンチです。この言葉があまりにも見事だったので、川崎市の母子手帳に記載されるようになりました。

——学校で一番多いじめが発生するのは小学校2年生だと伺いましたが、それはなぜでしょう？

西野 最新のデータでも、小学校2年生で一番いじめが多く、2位が3

年生、3位が1年生です。つまり、いじめは小学校低学年に集中しているのです。

現在、小学校から高校までで、73万件のいじめが報告されています。

ただ、これは先生が気付いて、文科省までたどり着いた件数なので、氷山の一角ですが、この73万件の内、58万件は小学生です。中学生は12万件、中学生の5倍は小学校で起きています。

つまり、小学生が如何にストレスを溜めこんでいるかということです。親は、「正しい親になりたい」「人から後ろ指刺されない親になりたい」「早くから習い事させて、より効率よく勉強させて、人から羨まれるような親になりたい」という思いがあるので、どんどん子どもに習い事させて、どんどん子どもの時間を奪うのです。

「そんなことやつてるより、これをやつた方がいいでしょ」、「その時間があるならこの習い事もしようね」と、いつの間にか子どもの時間は全部親によって細分化され、遊びたい

ように遊ばせてもらえない。生きていることが楽しいと思えないような時間を積み重ねる中で、そのストレスのはけ口としていじめが起こってしまう。

ある小学校2年生の子が私に教えてくれました。「俺、九九ができないからんだよね。そしたら、親からこっぴどく怒られて、『お前、九九ができないたらな、将来、算数も数学もできないで、ろくな大人になれないぞ。九九はしつかり覚えろ！』って言われたんだ。だから、俺悔しくて、学校行って、俺より馬鹿なやつに四の段を言わして、そいつが言えなかつたから、『お前四の段もできねえのかよ。バーカ！』って言ってやったんだ」と。

つまり、結局、親が自分の子どもをどんどん追い詰めた分、その捌け口は、自分よりできない子に向かうのです。これがいじめの構図の大きな部分を占めていると思っています。

——子どもが一番ストレスを感じる時期が、小学校2年生頃ではないか



〒213-0033 川崎市高津区下作延5-30-1 川崎市子ども夢パーク内

TEL: 044-850-2055 FAX: 044-833-7534 <https://www.tamariba.org/>

ということですね。

西野 そうです。以前に、近所の保育園の運動会を見に行くと、かけっこで年長さんが走ってきて、ゴール直前に鉄棒が置いてあるのです。そこで逆上がりしてからゴールしなければいけない。そもそも逆上がりは小学校で習うものです。

来賓席で、「なんで逆上がりをやるのですか?」と聞くと、「今、親御さん達から、『保育園の内に逆上がりできるようになつておかないと、小学校に上がつた時に、体育の時間にお腹が痛いからと休むようになつてしまふのです。すると、休み癖がついて不登校になつてしまふので、保育園にいる間に読み書き、計算、逆上がり、これは全部できるようにしてください』と圧が掛かっているのです」とのことでした。

だから、子どもは小さい頃からストレスを溜めるはずなのです。そのストレスがピークを迎えるのが小学校2年生頃です。親は、何でも全部できるようにしないと安心できず、



「あなたのためだから」と言つて、逆上がりの家庭教師までつける時代です。子どもには逃げ場がありません。

——情報が得やすくなり、何にでも正解を求める傾向が強いと感じますが、子育てに正解はありますか？

西野 子育てに正解はありませんが、一人の子が社会に生み出されることには、本当に奇蹟のようなことです。私自身も、子どもが「おぎやあ」と生まれて来た時は、本当に幸せでした。妻に対しても、世の中のあらゆる神様、仏様に対しても、「ほんとうにありがとうございます」と感謝しました。

しかし、わずか半年もしない内に、「あれ？ うちの子、なんだか寝返り

が遅いよ」で始まり、「うちの子、立つの遅いな」「言葉が出ないな」「食が細いな」と、どんどんできないことを拾い始めて行くのです。これは本当に命に対して失礼ですよね。

子育ての正解はありませんが、子育てで本当に大事な、ど真ん中のストライクは、子どもが生まれて来てくれたことへの感謝の気持を持ち続けられるかどうかだと思います。

他者の評価など気にせず、「人が何を言おうが、お前はお前でいいんだ。お前は父ちゃんと母ちゃんの子なんだから、堂々と生きろ！」もう生きててくれるだけで十分だ！」と言い切れる親がしっかりとくれば、何とかなります。

——子どもを育てようとする前に、親が育たなくてはいけないです。

西野 親として、自分の子どもが人間や世間に迷惑をかけないようにと思うのは当たり前のことです。しかし、子どもも大人も、失敗しながら育つて行くのです。

色々やらかして、「あの時ああ言えば良かった、ああすれば良かった」と後悔しながら人は育つて行くのに、その余裕がなく、隙間がなく、幅がなく、完璧を目指しなさいというような、失敗に対して不寛容な時代になってしまっています。

私達が生きて来た時代は、大人のダメさがいっぱい見えていました。私は浅草育ちなので、酔っぱらって路上で寝ている人や、わけの分からぬことやつたりする人など、ダメな大人がたくさんいました（笑）。

でも、そういう大人達を見て育つと、「なんだ。大人って完璧な人だけじゃなくて、あんなこともやつちやうんだ」と思うのです。そうやって育つてきたことは、今振り返ってみても、決して不幸なことではありませんでした。

正しいことを言えば、正しい人間が育つというのは、傲慢な考え方です。失敗を許容しながら、人はちゃんと変わるとということを信じて、自分で自分を振り返る力が大事です。（つづく）